ひとりごと

「Mission impossible」

大阪から研修生として文科省へやってきたのは、１０月。この原稿を書いている私は、こちらに来て、まだ３か月目である。そんな私に、この『ひとりごと』の依頼が舞い込んできた。そうなったのも『いい意味』で、隣の席のＭさんのおかげではある。せっかくの機会なので、この３か月の東京生活について書いてみたいと思う。

大阪から東京へ旅立つ日。不安な気持ちしかなかった。

というのも電車通勤をしたことがない、一人暮らしすらしたことがない私にとって、東京という街で本当に暮らせるのか、仕事のことよりもそれが心配だった。

案の定、勤務初日から朝の通勤ラッシュ。もうこれ以上人が乗ることはできないだろうと思うほど車内にはすでにたくさんの人が乗っている。私は、その電車に乗るか乗らないか悩んでいたら、後ろからさらに人が押し寄せ、その波にのまれながら何とか乗車した。これからこれが毎日続くのかと考えるだけで地獄だった。しかし、慣れというのは恐ろしい。今では、自分が前の乗客を押してまで乗り込むようになった。

一人暮らしも同じである。最初は、環境が変わり、なかなか眠ることができなかったが、今ではぐっすり眠れるようになった。また、休みの日は家に引きこもっていたが、最近では、自転車や電車に乗ってでかけたりするようにもなった。環境が変わっても何とかなるのである。むしろ、今の自分は、次の休みの予定を考えることが楽しみとなり、東京での一人暮らし生活を満喫している。

ただ唯一の悩みとしては、食費である。東京でのランチを楽しもうとすると、だいたい千円近くの出費になる。もちろんチェーン店やコンビニで済ませれば、安く抑えられるのだが、せっかく東京に来たのだ。そして、何よりも文科省の近くには、たくさんの飲食店がある。ここでしか食べることができないこともの食べたいという欲には勝てない。そのため、食費に係る出費は、大阪で暮らしていたときよりも倍近く増えてしまった。

これを解決するには、妻に小遣いを増やしてもらうしかない。私は妻と子供を大阪に残し、単身赴任している。そのため、家族とはテレビ電話で定期的に連絡をとるようにしている。しかし、この連絡は今の私にとって、妻との良好な関係を保ちながら小遣い交渉をするための手段となってしまった。いつ小遣い増額について話すか、現在タイミングを図っている。残りの東京生活を満喫できるかどうかがかかった大事なミッションである。

この記事が掲載されるころ、私のランチはどうなっているのだろう。

（T.I）